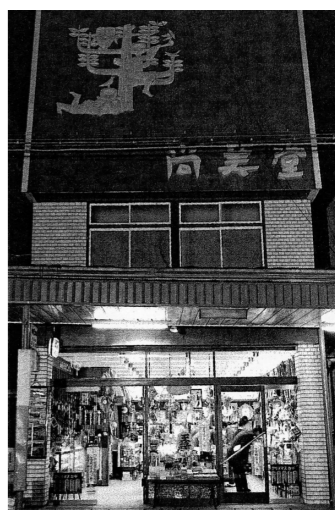




東北芸術工科大の学生がデザインしたサクランボのマグカップ



五輪のマークをアレンジしたフクロウ(上)とお鷹ぼっぼ(下)



昭和32年当時の七日町店

山形の土産品卸・小売業の老舗(株)尚美堂

贈り物に新たな風

JR山形駅ビル2階、(株)尚美堂のセレクトショップ「エスパル店」。

オープンスペースの店内に入ると、

手のひらサイズのお鷹ぼっぼ、五輪マークをアレンジしたフクロウの木彫り、米沢織の巾着、東北芸術工科大生がデザインしたサクランボのマグカップなどが整然と棚に並ぶ。

生活様式や時代のニーズが大きく変化している今、山形の土産品・工芸品の優れた技術と伝統を護りつつ、未来を見据えた新しいデザインの山形の贈り物

をブランド化し、提供していきたい。

「エスパル店」には、逸見良昭代表取締役と英子夫人、社員の思いが込められている。

創業は昭和12年。河北町谷地西里に生まれた祖父逸見賢次郎と妻みつが、東京・神田神保町の「尚美堂」で商いのイロハを修め、「商売するなら山形一の繁華街で」と現在地に店を開いた。当時の七日町旭銀座通りは映画

館、食堂、ダンスホール、カフェが軒を連ね、週末ともなれば娯楽を求めた人で賑わった。商品は映画スターのプロマイド、アルバム、額縁、花札・将棋駒といった娯楽品。

神田の店から仕入れて販売した。創業当時の店の写真が残っている。昭和26年に株式会社組織となり、本格的に土産品業界に参入。旭銀座の店に加えて、国鉄の鉄道弘済会が直営していた山形駅構内の売店「キヨスク」に進出、花笠人形や、こけしといった土産品を置いた。

「伝統の土台の上に新しいものを」との思いは、工芸品や民芸品づくりに取り組んでいる若い作家を支援するとともに、卸業者の枠を超えて新たな商材開発に目を向ける。その象徴が「ミニ花笠の開発」。

山形花笠まつりを支えている花笠は、作り手の高齢化が進み、「このままでは十数年後には花笠まつりの開催が危ぶまれる」（逸見氏）という状況に。このため、山形市鈴川地



迫る山形花笠まつり。緑町の本店では花笠の仕上げが進む

七日町店 山形市七日町2丁目7番18号
ナナビーンズ1階北側
(☎023-622-3947)

エスパル店 山形市香澄町1丁目1番1号
山形駅ビル エスパル2階
(☎023-628-1232)



女性を主なターゲットにしたセレクトショップ「エスパル店」。新しいデザインの山形の贈り物を提供したいとブランディングに取り組む



福島の東北絆まつりでは「ミニ花笠」のワークショップを開催。逸見夫妻が指導し人気を集めた

(株)尚美堂

創業 昭和12年5月1日
会社設立 昭和28年5月2日
代表取締役 逸見 良昭
資本金 10,000,000円
本社 山形市緑町2丁目11番18号
(☎023-631-1411)
(E-mail info@shoubidou.co.jp)

区の若手農業団体と、休耕田で花笠の素材となるスゲを栽培、花笠踊り発祥の地である尾花沢市で生産体制をつくり、花笠の裏側を支える竹枠づくりを、飯豊町中津川の職人に学ぶ一方、作り手を広く求ようと「ミニ花笠作り」を考案した。

気軽に手に取ることのできる大きさの花笠を、土産品として多くの人に販売することによって広く知ってもらい、商業ベースに乗せることによつて作り手確保につなげようという考え。需要のめどが立ったことでも本格的に生産を開始した。

花笠の販売を一手に引き受けてきた責任であり、次世代に技術を継承しなければならぬという思いです。ミニ花笠は文化交流のツールとして活用できます。

逸見氏の父啓氏(二代目)は、長年にわたって県、東北の水泳連盟の会長、全国市町村教育委員会副会長として交友の輪を広げた。逸見氏も全国PTA副会長として、また、リノベーションによる街づくりが進んでいる協同組合旭銀座のれん会理事長として商店街の活性化に取り組んでいる。人と人とのつながりが、アイデアを生み活性化につながる。創業80年余。老舗の挑戦が続く。